

◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第22回/戦後の朝香宮邸(中編)―吉田茂・目黒首相公邸

Residence of Prince Asaka 1933―

あさかのみや

戦後、朝香宮邸の新しい住人は時の総理大臣・吉田茂(1878-1967)でした。1947(昭和22)年頃から1954(昭和29)年まで、外相公邸、首相公邸として使用していました。吉田茂は外交官として出発し、日本の戦後処理と復興に尽力した名宰相として知られています。吉田の外交官時代を支えた雪子夫人は昭和16年に他界し、その後、政界に登場してからの吉田をサポートしたのが三女和子さんでした。

「しばらくして、父は外務大臣公邸から永田町の首相官邸に居を移しました。ところが、永田町の総理官邸は父の気に入りません。お掃除が行き届いていない分ほこりっぽくて、ベトベトして非衛生的で、とても住めるようなところではないと父はいうのです。そこで白金の朝香様の御殿を拝借して、もうひとつ目黒の公邸としました。こちらは、お隣りが自然公園でしたので、ほんとうにタヌキヤムジナが出ます。国会にもタヌキが出るけれど、首相公邸にもやはりタヌキが出るというのが、父の気に入りの冗談でした。この朝香様のお屋敷をお借りするにあたって、じつは陛下から、「朝香宮のところから借りてやってくれないか」とのご依頼があつてのことだったという事情を、当時の秘書官の方から聞いています。当時、お台所向きがあまりお楽ではなかった宮様方のことを陛下はたいへん心配されて、父のもとにご相談があつたようです」*1

前号の本欄に記した通り、朝香宮家をはじめ各宮家は昭和22年3月までの期限で財産税の納付を迫られていました。吉田茂は昭和20年9月東久邇宮内閣外相、10月幣原内閣外相を歴任し、翌年の5月第1次吉田内閣を成立、外務大臣を兼任しています。猪瀬直樹氏は著書の中で次のように述べています。「昭和21年、外務大臣吉田茂はこの朝香宮邸を外務大臣公邸として借り上げることにした」。そして具体的には「吉田が外相公邸として朝香邸を借りたのは昭和22年3月であった」とあります。*2 猪瀬氏によれば、外相公邸として外務省公式記録には残っておらず、



図1

当時の外務省係官のメモにより僅かに確かめられるのみということです。

第1次吉田内閣は昭和22年5月に総辞職しますが、その後の吉田政権は、23年10月の第2次内閣から6年余り続きました。昭和29年12月7日付朝日新聞には「目黒の六年」の大きな見出しが踊り、第5次まで続いた長期政権の終わりを告げています。「目黒にうかがいを立てる」という言葉にも明らかなように、戦後、白金台の旧朝香宮邸はまさに宰相吉田茂が戦後の舵取りを行った歴史上重要な場所だったので。(次号に続く/高波)◆



図2

図1.「朝日新聞」
1954(昭和29)年12月7日夕刊
右下写真が目黒公邸時代の旧
宮邸。外観一面が嵩で被われている。

図2.吉岡専造/撮影
「写真集 吉田茂」より
「目黒公邸にて 昭和26年8月」
財団法人吉田茂国際基金
2004年
吉田茂は、旧朝香宮邸の殿下書
齋で政務をとっていた。

*1.麻生和子「父 吉田茂」
光文社 1993年

*2.猪瀬直樹「ミカドの肖像」
小学館 1986年